

中学校道徳教科書における「郷土の伝統と文化の尊重」  
— 日本の民謡に着目して —

鈴木 慎一郎

Respect for Local Traditional Cultures  
in Textbooks on Moral Education for Junior High Schools :  
Investigation of Japanese Folk Song

SUZUKI Shinichiro

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 第16巻 第2号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.16 / No.2

令和2年 1月 31日発行 January 31, 2020

# 中学校道徳教科書における「郷土の伝統と文化の尊重」

- 日本の民謡に着目して -

鈴木慎一郎\*

## Respect for Local Traditional Cultures in Textbooks on Moral Education for Junior High Schools: Investigation of Japanese Folk Song

SUZUKI Shinichiro\*

キーワード：中学校道徳教科書，郷土の伝統と文化の尊重，日本の民謡，島唄，岩崎卓爾

Key Words: Textbooks on Moral Education for Junior High Schools, Respect for Local Traditional Cultures, Japanese Folk Song, Shimauta, IWASAKI Takuji

### はじめに

本稿の目的は，中学校道徳教科書における「郷土の伝統と文化の尊重，郷土を愛する態度」に関する取り扱いを整理，検討することである。

2006（平成 18）年，教育基本法が改正され，前文に「伝統を継承し，新しい文化の創造を目指す教育を推進」，第 2 条第 5 項に「伝統と文化を尊重し，それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに，他国を尊重し，国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が追加された。これを受け 2007（平成 19）年，学校教育法も改正され，第 21 条の義務教育の目標として「我が国と郷土の現状と歴史について，正しい理解に導き，伝統と文化を尊重し，それらをはぐくんできた我が国と文化を愛する態度を養う」ことが追加された。また，2008（平成 20）年告示の中学校学習指導要領の道徳教育の目標において「伝統と文化を尊重し，それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し，個性豊かな文化の創造を図る」が加わった<sup>1</sup>。

2014（平成 26）年に設置された，道徳教育専門部会では「道徳に係る教育課程の改善等について」答申を行った。この答申を踏まえ，2015（平成 27）年に学校教育法施行規則を改正し，「道徳」を「特別の

教科である道徳」とするとともに，小学校学習指導要領，中学校学習指導要領及び特別支援学校小学部・中学部学習指導要領の一部改正の告示を公示した。改正中学校学習指導要領は，2015（平成 27）年度から移行措置が行われ，2019（平成 31）年度から全面实施されている。

今回，「特別の教科」となったことに伴い，検定教科書が導入され，2018（平成 30）年，8 社の教科書が検定に合格し，2019（平成 31）年度から使用されている。

これまでに筆者は，2018（平成 30）年度から使用されている小学校道徳教科書における「我が国や郷土の文化」に関する取り扱いを整理し，中でも日本の民謡がどのように取り上げられているかについて明らかにした<sup>2</sup>。筆者は小中一貫を図った音楽デジタル教科書を活用した日本の民謡の指導法開発に取り組んでいる。では中学校道徳教科書ではどのような傾向があるのだろうか。

研究の方法としては第一に中学校学習指導要領を概観した後，中学校道徳教科書における「郷土の伝統と文化の尊重，郷土を愛する態度」に関する教材を整理する。第二に日本の民謡に着目して，教材分析を行う。

\*鳥取大学地域学部地域学科人間形成コース

## I. 中学校学習指導要領における「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」

まずは中学校学習指導要領において「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」がどのように位置付けられているか確認したい。

表1は2008(平成20)年告示と2017(平成29)年告示の中学校学習指導要領における「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」を新旧対比したものである。

表1 中学校学習指導要領

2008 (平成20) 年	地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努める。
2017 (平成29) 年	郷土の伝統と文化を大切にし、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め、地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、進んで郷土の発展に努めること。

2017(平成29)年告示の中学校学習指導要領では、新たに「郷土の伝統と文化」が盛り込まれている。各用語については次のように解説される<sup>3)</sup>。

「郷土」とは、自分の生まれ育った土地ないし地理的環境のことである。また、郷土とは文化的な面を含んでおり、自らがその土地で育てられてきたことに伴う精神的なつながりがある場所を示している。

「伝統」とは、長い歴史を通じて培い、伝えられてきた信仰・風習・制度・思想・学問・芸術などのことであるとともに、特にそれらの中心をなす精神的な在り方。

「文化」とは、人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果を指し、衣食住をはじめ技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容を含んでいる。

都市化や過疎化が進み、郷土に対する愛着や郷土意識が希薄になっている傾向を問題視し、地域社会が大切な生活の場であることを主張する。「郷土によ

って育まれてきた伝統と文化に触れ、体験することを通して、そのよさに気づき、郷土に対する誇りや愛着をもつとともに、郷土に対して主体的に関わろうという心や態度も育まれる」と説明する<sup>4)</sup>。具体的な指導に関しては「地域の方に郷土の伝統文化を尊重し郷土を愛する思いを語ってもらうことや、郷土について調べたことや地域の行事への参加体験等に基づいた話合いを通して、郷土に対する認識を深め、郷土を愛しその発展に努めるよう指導していく必要がある」とする<sup>5)</sup>。

## II. 道徳教科書における「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」

中学校道徳教科書は、東京書籍、学校図書、教育出版、光村図書、日本文教出版、学研教育みらい、廣済堂あかつき、日本教科書の8社から発行されている。なお、東京書籍、学校図書、教育出版、光村図書、日本文教出版、学研教育みらい、廣済堂あかつきについては、小学校道徳教科書も発行する。まずは中学校道徳教科書全8社において「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」がどのように取り扱われているかについて整理したい。

表2は中学校道徳教科書における「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」を取り扱った主題を一覧にしたものである。「民謡」「音楽」「祭り」について扱われている場合、「○」で示している。

表2に示した通り、民謡が掲載されているのは2件である。東京書籍の第3学年に「郷土に息づく心にふれて」という題材で、奄美の島唄が取り上げられる<sup>6)</sup>。他方、学校図書の第2学年に「台風の島に生きる」という題材で、石垣島測候所に所長であった岩崎卓爾(1869~1937)が、1912(明治45)年に『八重山童謡集』を刊行したり、八重山芸能を紹介したりした生き方が取り上げられる<sup>7)</sup>。なお、東京書籍の第1学年に福岡県民謡の「炭坑節」があるものの、付録として数行紹介されるに留まっている<sup>8)</sup>。次項では「郷土に息づく心にふれて」と「台風の島に生きる」について検討する。

表2 中学校道徳教科書における「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」

発行	年	主題	地域	民謡	音楽	祭り	備考
東書	1	ふるさとのために 心に郷土を刻もう ※郷土のことを考える	岐阜 広島		○		中山太鼓, 地歌舞伎 炭坑節
	2	郷土の魅力にふれて ※郷土のことを考える	秋田			○	竿燈祭り 鹿角の花輪ばやし
	3	郷土に息づく心にふれて ※郷土のことを考える	鹿児島	○	○		島唄
学図	1	飛騨の匠の造った家 生き続ける遺産 深良用水	岐阜 静岡				
	2	脈々と受け継がれる錦帯橋 台風の島に生きる	山口 沖縄	○	○		八重山童謡集
	3	桑の都 北限の稲作に挑む	東京 北海道				
教出	1	伝えたい味 ※受け継がれる博愛の精神 ※子どもも親も笑顔の町に ※「夢」をつなぐ	埼玉 愛媛 東京 愛知				
	2	伝えるということ ※サッカーの種をまく	福島 静岡		○		請戸の田植踊
	3	外国から見た日本人 ※世界に誇る「BONSAI」	東日本 埼玉				
光村	1	なおしもん	石川				
	2	私の町	新潟		○	○	村上大祭
	3	村長の決断					
日文	1	震災を乗り越えて 篠崎街道	岩手 東京		○		法の脇鹿踊り
	2	和樹の夏祭り				○	
	3	「稲むらの火」余話	和歌山				
学研	1	壊れた掲示版	岩手				
	2	五色桜	東京				
	3	ねぶたを夢見て	青森			○	
廣あか つき	1	アップルロード作戦	長野				
	2	相馬野馬追の季節	福島				
	3	千年先のふるさとへ ※希望新聞	宮城 岩手				
日科	1	銅像が教えてくれたこと 雄司の自慢	和歌山				
	2	よ～いや, さ～～ 受け継がれた夜	高知 石川		○ ○	○ ○	盆踊り 早船狂言
	3	なせば成る	山形				

凡例 東書：東京書籍，学図：学校図書，教出：教育出版，光村：光村図書，日文：日本文教出版，学研：学研教育みらい，廣あかつき：廣済堂あかつき，日科：日本教科書。※：補充教材。

### Ⅲ. 道徳教科書における日本の民謡

#### 1. 「郷土に息づく心にふれて」の分析

「郷土に息づく心にふれて」の題材では、生徒作文である「島唄の心を伝えたい」が掲載され、次のように始まる。

私は現在、島唄を習っています。まだまだ上手には歌えませんが、たまに人前で歌ったりします。みんなすごく喜んで聞いてくれます。ときには、おじいちゃん、おばあちゃんたちが、目になみだをうかべてじっと聞いていることもあります。きっと昔のことを思い出しているんだなあと思います。家族のこと、友人のこと、たくさんのことです。

(p. 21)

島唄を習い始めたときは、ただ何も考えずに歌っていたが、次第に、歌詞の意味を考えたりしながら、気持ちをこめて歌おうと努力するようになった。

加藤清明は、地域の島唄三線教室を「公民館講座、公民館自主講座、個人教室」に分類し、島唄の衰退や継承の危機に対応して公民館講座が始まったと言及する<sup>9</sup>。1979（昭和 54）年からのほぼ 10 年間は、中央公民館を中心に開設され、80 年代の終わりから 90 年代に少しずつ集落に拡がり出したと分析する。教授法に関しては、教室ごとに違いがあり、本来の口頭伝承で伝える方法もされることもあるが、歌詞集綴り（冊子・本）や楽譜本が発行され使用されることもある。島唄では個人的要素、即興的要素が高いため、本来の島唄の雰囲気や損なう課題もみられる。

一方、学校教育も島唄の継承に取り組んでいる。1998（平成 10）年告示学習指導要領では「総合的な学習の時間」が新設された。それを受け、奄美群島各市町村の教育委員会は「特色ある開かれた学校づくり」を教育目標の一つに掲げ、総合的な学習の時間における郷土学習の一環として、奄美群島の文化を学ぶ教育実践が開始された。須山聡の 2009（平成 21）年度に実施した調査によると、学校における継承活動は、「①通常の授業：85 件、②課外活動・特別活動：31 件、住民による活動：17 件」であった<sup>10</sup>。芸能の「教材化」に伴い、確実な継承が図れる半面、楽譜化、文字化されたテキストを用いることで、自由を失い硬直化されてしまったという課題が浮上したと指摘する。

奄美では、「歌半学」といって、唄を習うことは学問をすることと同じだと言われてきています。台風などの自然災害、天災、ききん、黒砂糖の強制生産、疫病という過酷な日々の中で貧しさとたたかいながら、助け合い、はげまし合って生きぬいた祖先の知恵が、唄の中にこめられているからです。苦難の歴史の中で歌いつがれてきた島唄の心を理解し、表現するのはとても難しいことです。また、歌詞は奄美独特の方言なので、言葉の意味が分からないと歌えません。だから、方言の勉強も欠かせません。

(p. 22)

島唄教室に 4 年間通い続けてきた。その間、何度ももうやめようかと思ったこともあったものの、地域の人からの声援を受け、継続することができた。そして「島唄を続けてきてよかったと心から思っています」と語り、最後に次の文で閉める。

生まれた島が好きだから、島の心を大切にしたいから、私はこれからも歌い続けていきたいと思えます。ずっとずっと島唄を。

(p. 23)

その他、《朝花節》と《行きゅんにゃ加那節》の歌詞と歌意も掲載される。ちなみに、教育出版の中学校第 1 学年の音楽教科書において《朝花節》が紹介されている<sup>11</sup>。

生徒たちの考える視点としては、「島の心」とは、どのような心のことだろう」と「自分たちの郷土にはどのような心が息づいているだろう」の 2 点が挙げられている<sup>12</sup>。

このように中学生が島唄を実際に習い、奄美に対する郷土愛が育まれていく姿が描かれているが、継承に伴う画一化等の課題については触れられていない。

#### 2. 「台風の島に生きる」の分析

「台風の島に生きる」の題材の原作は、谷真介『台風の島に生きる：石垣島の先駆者・岩崎卓爾の生涯』（1976）である<sup>13</sup>。石垣島測候所に所長として着任した、岩崎卓爾（1869-1937）のライフヒストリーを辿り、学習が展開される。

着任した岩崎は、迷信や言い伝えに頼っていた非科学的な島民の生活を是正したいと考えていた。島出身の若い所員と会話し、

「それは、君の言うとおりで。なにも、全部いかに言っているのではない。だから、そいつを調べてみるんだ。島に伝わる天気のことわざを全部集めて、どれが正しいか、どれが迷信かを調べてみる。そうすれば、島の人たちも納得するだろう。迷信をなくすことも、てんぶんやあの仕事の一つだ。」

(中略)

こうして、島の人たちとの触れ合いを通して天気のことわざを採集し始めた卓爾の、島に対する関心は、石垣島をはじめとする八重山諸島の動植物から始まって、歴史、民謡、名所や珍しい習わしなど、多方面に向かっていった。

(p. 92)

1910 (明治 43) 年、日照りに見舞われ、雨乞いの行事が行われていた。通りかかった岩崎は「だめだな。雨乞いをやってもだめだ。この空では雨はまだ当分降らん」と言ってしまった<sup>14</sup>。それを聞いた島の人たちは怒りだし、岩崎は大きな木の根もとにくくりつけられてしまった。

卓爾はこの時、今まで自分と島の人たちとの間にあった見えない垣根に、初めて気がついた。その垣根を取り払わない限り、これから島に住み続けることができるわけがない。

卓爾は、この時以来、自分も島人の一人であるという意思をはっきりともち始めたのである。そして、島で雨乞いの行事や祭りがあると、自らそれに加わって歌い、踊り始めるのであった。「郷に入れば郷に従え。」ということわざがあるが、そこには、その「郷」の土になることを自ら望んでいた一人のやまとんちゅうの、ひたむきな姿がうかがえる。

(p. 93)

齋木喜美子は「科学者であるがゆえに、おそらく研究対象として島を見ていたであろう卓爾が、生活者として島の人々に寄り添い、島の教師たちと連帯していくうちに、彼の活動は教育実践的生活を強めていった」と考察する<sup>15</sup>。

本文は次のように続く。少々長いが、音楽に関する内容のため引用したい。

明治 45 (1912) 年、卓爾は、島の探究の成果である『八重山童謡集』を自費出版で刊行した。

この童謡集は、島に古くから伝わる子供たちの歌 62 編を採集し、解説を加えて紹介したもので、卓爾がいかに八重山を愛していたかがうかがえる書物である。

その中で紹介し、解説を加えている歌にこんなものがある。

つきのかいしゃ、とかみいか、みやらびかいしゃ、とうななつ。ほうい、ちょうか。

この歌は、本土に古くから伝わる童謡の一つ『お月さまいくつ』の謎を解いてくれる。卓爾の解説は次のとおりである。

『月の美しいのは十三日、乙女の美しいのは十七歳』これは内地にて歌う『お月さまいくつ、十三、七つ、まだ年や若いな…』の原歌なるべし。中央部にて意味を失える歌が、西南の孤島にてその意味を保存せるは注意すべきことなり。琉球郡島はあたかも古博物館とも言うべきか？」

文明が進化してくると、古い文化は淘汰され、あるいは改良されて、そこからまた新しい文化様式や生活の習慣が生まれてくるようになる。私たち人間の生活文化は、そのようにして連続と続いてきたわけだが、地方ではそのまま昔の文化が残されていることもある。

(pp. 93-94)

『八重山童謡集』の「序」には、沖縄学の父として知られる、伊波普猷 (1876-1947) が次のように寄せる<sup>16</sup>。

岩崎君が『八重山童謡集』を出版すると聞いて、私は端なくも 3 年前八重山に遊んだことを想出した。八重山は宛然ホーマーのユリセスの中に書いてあるセースの島のやうな所だ。その音楽にはちよつと立ち寄つた旅人を永久に囚へる魔力がある。その無名の詩人はかつて「ばしの鳥」といふ調の高い立派な象徴をさへ歌つた。八重山は実に歌の国だ。(以下、略)

1910 (明治 43) 年、沖縄県立沖縄図書館の初代館長として着任した伊波は、積極的にフィールド調査も行い、岩崎とも 1907 (明治 40) 年に出会っている<sup>17</sup>。伊波は『八重山童謡集』の校訂にも協力した。

なお、1919（大正8）年に貴族院書記官長を辞任した柳田国男（1875-1962）は、最初の3年間は国の内外を旅行できるという条件で、東京朝日新聞社客員となる<sup>18</sup>。1921（大正10）年、沖縄を訪れ、研究から遠ざかっていた伊波に学問を勧め、学究の道へ導いた<sup>19</sup>。柳田は石垣島にも行き、岩崎の官舎にて八重山芸能を紹介される。柳田は驚嘆し、「私は音楽と舞踊については専門の知識をもっていないから、来年その道の権威を派遣して大いに研究してもらおう」と約束した<sup>20</sup>。翌年の1922（大正11）年、音楽学者の田辺尚雄（1883-1984）が訪れ、八重山芸能を鑑賞し、高く評価する<sup>21</sup>。

ところで、町田嘉章・浅野建二編『わらべうた』（岩波書店、1962）には、《お月さん幾つ》（東京）が所収され、発生・起原は未詳とし、行智（1778-1841）編『童謡集』（1820）、『俳諧鼠山集』（1651）にみられ、近世初期には普及した唄と推察する<sup>22</sup>。

同書の『わらべうた』には、上記の《月ぬ美しや》（沖縄）も掲載され、「有名な八重山童謡の一。本土の「お月様いくつ、十三七つ」の歌意を解釈する上に参考資料となる」と記される<sup>23</sup>。

右田伊佐雄は、歌詞の「十三七つ」の解釈について、下記の4種に分類する<sup>24</sup>。

①加算して年齢とする説

例えば「十三七つ」なら20歳となる。

②十三夜の月の七つ時とする説

これは『俳諧鼠山集』の中の「お月さまいくつ十三七つ時」の句に基づく説で、十三夜月はおよそ七つ時（午後4時すぎ）に出るという事実を歌ったものだとする。

③十三夜月と十七歳女子の対比説

これは、八重山の有名な民謡「月の美しや、十日三日、女童美しや、十七つ」に基づくもので、「お月さまが美しいのは十三夜、娘が美しいのは十七歳」という意味だとする。

④閏月七回説

これは国文学者山田孝雄の説で、旧暦で閏年（年13ヶ月）が19年に7回あることを歌ったとするもの。

町田・浅野によると、大阪、和歌山では「十三一つ」、鳥取、島根では「十三九つ」の歌詞が使われている<sup>25</sup>。ちなみに『鳥取のわらべ歌』（1985）には、《お月さんなんぼ》という曲名で、4種類（三朝、福部、大山、日吉津）の曲が紹介される<sup>26</sup>。4曲中

3曲が「十三九つ」で、福部のみ「十三七つ」を使用する<sup>27</sup>。

外山守善は、《お月さん幾つ》の「十三七つ」の意味解きを、柳田国男が八重山童謡の《月ぬ美しや》に求められたことを解説する<sup>28</sup>。では《月ぬ美しや》は《お月さん幾つ》の原歌と断定できるのだろうか。吾郷寅之進はこの説に対し否定的で、本土では1650年代以前に《お月さん幾つ》は成立していたとし、八重山の《月ぬ美しや》よりも160年以上も以前に成立していたと推測し、《月ぬ美しや》を原歌とする説を否定する<sup>29</sup>。

1907（明治40）年、前田林外（1864-1946）によって『日本民謡全集』（正・続、本郷書院）が発行される。坪井秀人によると、『日本民謡全集』には「お月様幾つ…」で始まる月の唄が44篇（正篇28篇・続篇16篇）採録され、仙台から鹿児島まで各地に及ぶとされる<sup>30</sup>。八重山童謡については触れてはいないが、以下のように考察する<sup>31</sup>。

起原としての単一なる原態の存在と、そこからヴァリエーションがツリー条に派生（変化）していくという過程を想定していたからだ。だが《お月様幾つ》の歌は、その暗示する内容が子どもの理解を前提にしないばかりか、子守女や大人にとっても謎めいた部分を含んでおり、逆にそのことによって基本的な骨組みをもとに地域や場面に応じて自在にインプロヴァイスできる空白部分を内蔵しえたと言える。

また、「曲節や表情において各地それぞれの仕方で発酵が進んだのであろう。とともに地方と地方の間の交通が歌に差異と類似とが複合する味わいをもたらしたであろう」と解釈する<sup>32</sup>。

これらを整理すると、《月ぬ美しや》が《お月さん幾つ》の原歌とは断定できないのである。岩崎の解説をうのみにすることに対して慎重にならなければいけない。

## おわりに

24冊の中学校道徳教科書を分析した結果、東京書籍の第3学年と学校図書第2学年において日本の民謡が題材とされ、奄美と石垣島と、いずれも九州南方の民謡が取り上げられていた。ただしアプローチの仕方は異なり、奄美に関しては、今を生きる中学生と島唄と向き合う姿が描かれていたのに対し、

石垣島では戦前に生きた岩崎卓爾の郷土の文化と向き合う姿が綴られていた。いずれも心理の変容が明確にみられ、郷土の伝統と文化への意識を探る上では有効であろう。ただし、日本の民謡を一側面から解釈している傾向があり、多様な角度から目を向ける必要がある。

両教材に共通する課題としては、そもそも中学生たちは、民謡の「記録によらず伝承的であること」等の特質を理解しているのだろうか<sup>33</sup>。このことを理解していないと、各教材の描かれている背景をつかむことができないため、確認した方がよいだろう。

小学校道徳教科書では、《YOSAKOI ソーラン》であったのに対し、中学校道徳教科書では南国であった。南国の民謡は、沖縄音階で構成されていることが多く、生徒たちにとっても新鮮で心地よい印象を受けるだろう。

音楽の授業時数は限られている。今後も、総合的な学習の時間、特別活動、道徳、保健体育科等との関連を考慮した、小中一貫を図ったカリキュラムの構築を検討していきたい。

#### 付記

本研究は、JSPS 科研費 JP17K04785 の助成を受けたものです。

#### 注

- 1 文部科学省『中学校学習指導要領解説 道徳編』2008年、p.27。
- 2 鈴木慎一朗「小学校道徳教科書における「我が国や郷土の文化：日本の民謡に着目して」『地域学論集』第15巻第2号、鳥取大学、2019年、pp.83-94。
- 3 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』2018年、p.56。
- 4 同書、p.56。
- 5 同書、p.57。
- 6 渡辺満・押谷由夫ほか48名『新しい道徳3』東京書籍、2019年、pp.20-23。
- 7 松尾直博ほか9名『輝け未来 中学校道徳 2年』学校図書、2019年、pp.90-95。
- 8 渡辺満・押谷由夫ほか48名『新しい道徳1』東京書籍、2019年、p.175。
- 9 加藤晴明「奄美島唄という文化生産：島唄の教室化をめぐる（1）」『中京大学現代社会学部紀要』第12巻第1号、中京大学、2018年、pp.41-70。
- 10 須山聡『奄美大島の地域性：大学生が見た島／シ

マの素顔』海青社、2014年、pp.75-94。

- 11 新実徳英監修『中学音楽1 音楽のおくりもの』教育出版、2017年、p.40。
- 12 『新しい道徳3』、前掲書、p.23。
- 13 谷真介『台風島の島に生きる：石垣島の先駆者・岩崎卓爾の生涯』偕成社、1976年。
- 14 『輝け未来 中学校道徳 2年』、前掲書、p.92。
- 15 斎木喜美子「近代八重山の児童文化活動に関する研究：岩崎卓爾の実践を中心として」『教育方法学研究』第24巻、日本教育方法学会、1998年、p.3。
- 16 岩崎卓爾編『八重山童謡集』江馬活版所、1912年。
- 17 斎木、前掲書、p.3。
- 18 鶴見太郎『柳田国男：感じたるまゝ』ミネルヴァ書房、2019年、p.151。
- 19 柳田国男「伊波普猷君のこと」伊波普猷『伊波普猷選集中巻』沖縄タイムス社、1961年、序。
- 20 谷、前掲書、p.147。
- 21 谷真介「年譜・書誌」岩崎卓爾『岩崎卓爾一巻全集』伝統と現代社、1974年、p.452。
- 22 町田嘉章・浅野建二編『わらべうた』岩波書店、1962年、pp.134-136。  
また、以下の文献においても詳細に分析する。  
浅野建二『わらべ唄風土記下』塙房書、1970年、pp.33-46。
- 23 同書、p.120。
- 24 右田伊佐雄『子守と子守歌 その民俗・音楽』東方出版、1991年、pp.243-245。
- 25 町田・浅野、前掲書、p.135。
- 26 酒井薫美・尾原昭夫『鳥取のわらべ歌』日本わらべ歌全集20上、柳原書店、1985年、pp.130-132、pp.138-142。
- 27 筆者は学部2年の「地域調査プロジェクト」の授業の一環で、学生参画により、《お月さんなんぼ》について調査した。  
小松弘人・中知恵美・西浦望美・和田彩伽・鈴木慎一朗「鳥取のわらべうた・民謡に関する調査：《お月さんなんぼ》《吉岡小唄》に着目して」『地域教育学研究』11巻1号、鳥取大学、2019年、pp.63-69。
- 28 外間守善「解説」島袋全發『沖縄童謡集』平凡社、1972年、p.221。
- 29 吾郷寅之進・真鍋昌弘『わらべうた』桜楓社、1977年、pp.27-36。
- 30 坪井秀人『感覚の近代』名古屋大学出版会、2006年、pp.272-275。
- 31 同書、p.274。
- 32 同書、p.275。
- 33 小泉文夫『合本 日本伝統音楽の研究』音楽之友社、2009年、p.40。



